

ウィーン留学記

平成 15 年卒 中村彰太

2016 年 4 月より、ここオーストリア・ウィーンにあるウィーン医科大学(Wien General Hospital, AKH Wien)・胸部外科(Chief: Prof. Walter Klepetko)に Clinical Fellow として留学させていただいております。こちらで働き出して 1 か月ほど経過しました。まだまだ、言葉の壁が厚いのですが少しずつなれるよう努力している毎日です。

一日のはじまりは朝カンファレンスです。会話は主に英語で行われ、教授を中心に熱いディスカッションが繰り上げられます。場が白熱すると会話は独語がメインとなり、理解しづらいことも多々あります。カンファレンスが終わると手術が始まります。胸部外科の手術室は 2 つあり、毎日各部屋で 3-4 件ずつ定期手術が施行されます。その内容としては、椎体一部合併切除術・胸膜肺全摘術・Pancoast 腫瘍に対する胸壁合併切除術・気管一部切除および再建術などの拡大手術が毎日のように行われるかと思えば、CT 画像上 GGO 成分主体の早期肺癌に対する肺葉切除術・縦隔鏡によるリンパ節生検・胸腔鏡下による肺や胸膜生検・膿胸に対する肺剥皮術などの小さな手術が行われ、参加や見学していて飽きません。

そしてこの施設で最も素晴らしいところは、私が留学の目的としている肺移植手術を多く経験できることです。週に 2 件程度は緊急手術として施行されています。Clamshell による開胸・体外補助人工肺(ECMO)・肺切除とその移植・閉胸が流れるように行われます。患者さんの状態がよく順調にことが運ぶと手術終了時には ECMO から離脱でき、術後短期間で抜管するスピーディな経過です。まだ 10 件程度に立ち会っただけで、理解できていないことが多いので、ひとつひとつの手技を目と耳とからだに染み込ませるよう集中して手術に入っています。移植の診療体制についても学ぶことが多く、移植コーディネーター・術後管理をする移植内科医・集中治療医・病棟診療医・臨床工学技士など関わるプロフェッショナルたちが連携をとりながら移植診療にあたっています。これらの体制を日本に敷くことを想像するとかなり大変だなと実感します。

今、ウィーンは春になろうとする時期で日々暖かくなっています。昼間は極めてさわやかで過ごしやすいです。休みの日には近くの公園でゆっくりしたり、徒歩でウィーン市街地を観光したりしています。が、いつ移植で呼ばれるかわからないので油断はできません。

今月末には、ナポリの国際学会に、横井教授と尾関先生が発表にいらっしゃいますので、私も病院に休みをもらって駆けつけます。久しぶりにおふたりにお会いできることを楽しみにしております。

このたびは留学を御許可くださった横井教授と、いろいろとアドバイスを下さった医局の先生方に大変感謝しております。私は留学生としてまだまだ未熟ですが、残りの期間を存分に手術修練の場とし、成果を手術技術という形にできるように精一杯頑張ります。

